

藤沢市政策研究室 ニュースレター

Contents

2009. **3** Vol.40

- **今月の話題** 今月の別れ 政策研究の灯をあなたの胸に・・・
- 研究室からの風
- お知らせ 職員研究員の研究成果報告

■ **今月の話題** 今月の別れ

政策研究の灯をあなたの胸に・・・

あと数日で終了である。政策研究室は閉鎖される。かくして本号が最終版となる。

Vol40・・・第40号となり、けっこう長く続いたなあというのが率直な感想である。ニュースレターを始めた目的の1つは、本研究室を市役所内で広く認知してもらい、すべてのみなさんに対して解放的であることをアピールすることにあつた。設置された当初より、完全に開かれた部屋を目指していたが、「あの部屋は何をやっているんだろう」という声はなかなか少なくならなかったからである。

しかし本当に大事に思っていたのは、もう1つの目的である。すなわち、その時々争点になっている問題を市職員の方々に分かりやすく解説し、社会問題や政策構想・立案に対する関心を高めたいという願望である。

この目的に沿って最終号にて残しておきたいのは、次のメッセージである。すなわち、政策研究室はなくなるが、みなさまお一人おひとりの心に、政策を構想し、政策を具体化し、政策を見直し続けるという「政策研究」の意識を持っていただきたい。そしてその意識においては、具体的な事業の工夫だけにとどまらず、基礎的な研究や本質的なロジックの研究をより重視していただきたいというメッセージである。

政策研究といえば即座に連想するのが、本市に固有の「旬の問題」にどう対応すべきか考えることだろう。しかし政策研究とは、決してそればかりではない。むしろ本来の意味からいえば、統計データを丹念に整理・分析するような「基礎的研究」や、人類の幸福とは何か、社会のあり方とは何かを根本から考える「本質の論理研究」の方が、はるかに重要な政策研究なのである。そして、これら後者の研究の方が、一見すると遠回りに見えて、実は市民生活を本当に考えることにつながるのである。

かくも僭越なるメッセージを残しつつ去るのも失礼にすぎようが、長年にわたり通ってきた藤沢市への愛情ゆえということで、どうかお許しをいただきたい。みなさま方へのお礼は、研究誌「藤沢政策研究」第6号にて述べさせていただいているので、ここでごく簡単になるが、これまでの政策研究員と関係者のすべてを代表して、みなさま方に心よりの御礼を申し上げたい。

政策研究の意識に支えられて、藤沢の地域社会が個性的で活気に満ち、市民と市内在住の企業・事業が充実した日々を送れることをお祈りしつつ、政策研究室の扉を閉めることにする。長年のご愛読、誠にありがとうございました。さようなら。
(政策研究室 青木 宗明)

教養の意味

～あるいは、自治体職員にとっての政策研究とは～

一介の職員（それも主任級）の私が、政策研究室に配属され、このニュースレターに寄稿させていただいて今回で 36 回目になります。そして最後になります。時の話題ではありませんが、この 3 年間で最も学んだことをお伝えしたいと思います。先月号と併せてお読みいただくと幸いです。

教養（リベラルアーツ）という言葉は、もともとラテン語で「Artes Liberales（自由民の技能）」といいます。裏を返せば、古代ローマ社会では教養なき者（正確には「必要がない者」）は「奴隷」で、例えば武人としては優秀でも無教養な将軍アントニウスに対し、元老員議員キケロが「奴隷並みの男」という言葉を用いて非難した記録（「フィリッピケ弾劾」）が残っています。

ただし当時の奴隷は過酷な肉体労働者に限定されず、中には技術をもち、皇帝・執政官や元老員議員の秘書などを務める奴隷もありました。ちなみに技術のことは「Artes Mechanicae（機械的技能）」といいましたが、農民・商人・職人もローマ市民権を持つ自由民が普通でしたから、技術者の技能は「自由民の技能」と対立する概念ではありません。一方で当時の奴隷は議員秘書をするくらいですから、（敗戦国の捕虜など）教養ある者も多かったのです。

しかしながら「言われたこと（だけ）を実現する」「金で売買される自由なき（有能な）人材」が奴隷で、「自ら考えて動く」のが自由人という線引きは明確にあったのです。自律し、思慮深く行動するための技能が「教養」であり、それをともなってはじめてローマの責任ある「市民」たりえる、というのが当時の社会的通念だったのです。故にキケロは、カエサル（シーザー）暗殺事件後、カエサルの後継者を自称しその威光を笠にきたうえ、無思慮な政策でローマ社会を迷走させたアントニウスを「奴隷並み」という表現を用いて非難したわけです（アントニウスは怒ってキケロを処刑しますが、その後も暴走しつづけ、最後はエジプト女王クレオパトラの色香に迷って祖国ローマを裏切り、身の破滅を招きます）。

前段が長くなってしまいました。地方公務員法第 6 節の諸規定などを読むと、公務員というのは極論すると「法令例規」「上司」そして「市民」に仕える現代の「奴隷」に思えるかもしれません。

しかしながら先にのべたように「言われたことだけ実現する」奴隷としての仕事と、「考えて動く」自由人としての仕事の差は何か、どちらが闊達に仕事ができるのか。一目瞭然ではないかと思います。

公務員が自由人たる仕事をするにはどうしたらよいのか。やはりそれは「考えて動く」ために必要な知識教養を身につけることなのかもしれません。自分の領域の技能だけでなく、さりとて、ただ知識をため込むだけが目的のディレクタント（好事家＝教養オタク）でもなく、世の中の動きを常に思慮し、広く知識を習得・蓄積し、見識を以て道理を確立し、それを自分の居る場所でのミッション（住民記録、福祉、税務、建設、経済、教育、保育、清掃その他現業非現業問わずありとあらゆる公務）に対して活かすのが「自由人としての公務員」のあり方でしょう。知識教養は目的ではなく手段であり、政策研究は公務員としての知識教養を涵養する一手段なのです。

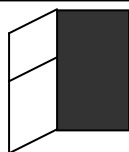
故に政策研究は一つの部署に帰属するものではなく、すべての職員に帰属すべきものなのです。政策研究室はなくなりますが、決して研究活動は終わった訳ではないのです。終わることがないのです。諸姉諸兄の政策研究が今後もますます発展することを祈念いたしまして、筆を置くこととします。三年間、御指導御鞭撻、叱咤激励を頂戴いたしまして、誠にありがとうございました。私も次の居場所で「終わりのない旅」を続けたいと思います。 （政策研究室 稲田 俊）

その一步、そとがわへ

『おしるし』って知っていますか？」先日、後輩が突然私に聞いてきた。どうやら彼が言いたかったのは出産の前兆として知られる「おしるし」の事らしい。趣味人で、失礼ながら出産とは現時点では縁のなさそうな後輩だったので、何事かと思いきよく話を聞いてみた。どうやら、JRの車内で流れているCMの事を言いたかったようなのだ。そう、私も見たのだが、近頃JR車内で「ダーリンは外国人」というマンガの出産編が流れている。絵柄はかわいいが、結構リアルなアニメで、個人的には一瞬ドキッとしつつ、楽しく車内の画面を眺めていた。「僕も日常では絶対に知り得ない知識なので勉強になりました」とは、後輩の弁。趣味(と研究)一筋の彼が少しでも出産に興味を持つきっかけを与えたのだから、結構な影響力だ。しかし、一方で後輩はこんな事も教えてくれた。「あのCM、結構ネットで叩かれているんですよ。『電車で陣痛の絵なんて、気分が悪くなる』って。」確かに多少はドキッとす。しかし、知っていた方がよいことだということ間違いないし、多くの特に若い男性にとってこんな機会でもない限り知り得ない知識であることも間違いない。

日々の生活を繰り返す中で、人はどうしても一つの知識や考え方を拠り所にしていく。しかし、それだけでは進歩はないし世の中はどんどんバラバラになっていく。その一步、そとがわへ勇気を持って踏み出すそのきっかけが必要だ。組織の中で「研究」をする意味は、実は、そとへ一歩踏み出すきっかけを組織の中に作り出すことではと思っている。研究室としての活動は終わっても、この役割を果たすべく今後も努力させて頂く所存です。

(政策研究室 天笠 邦一)



研究室からの風

政策研究室とのお別れにあたって

政策研究室には、長い間お世話になりました。ここでの活動ができなくなることにに対して残念な思いはありますが、これが評価であると受け止めたいと思います。筆者自身としては、ここで何を求められ、何をすべきかを常に模索する日々だったように思います。その意味では研究者に徹しきれなかった面があったのかも知れませんが、その点については後悔していません。いったん、ひとりの観光客に戻りますが、また、何らかのかたちでお役に立てる機会があれば微力を尽くす所存です。

政策研究室は、筆者の知る限り、平均すれば少なくとも半年に1度は視察の対象となってきました。視察に訪れたのは、行政関係者、地方議員、研究者等多様な組織に属する方々です。それなりに注目すべき先駆的な活動を行ってきた結果であるとひそかに自負しています。

最後に、この活動の最大の支えは、研究活動にも参画、助言しつつ、庁内における調整や庶務をこなしていただいた囑託を含む常勤職員の方々であったと思います。大水さん、山口さん、渡辺さん、福岡さん、稲田さん、坂井さん、重田さん、神田審議官、種部審議官、…まだまだ、御礼申し上げるべき方はたくさんいらっしゃいますが…本当にありがとうございました。

いつかふたたび FRI【Fujisawa Research Institute=Freedom (独立自尊) Realism (現実直視) Innovation (革新)】な調査・研究機関が藤沢市役所に生まれますように。

(政策研究室 其田 茂樹)

■ 平成 20 年度職員研究員研究のご報告

さる 2 月 6 日に今年度の職員研究員 2 名の研究成果を、先進都市派遣研修報告会の席で職員の皆様にご報告いたしました。また 3 月 31 日には市長・副市長への報告も予定されています。

河野夏枝さん（職員課）は慶應義塾大学 S F C の古谷知之准教授の研究室で、江の島を事例とした観光情報の発信について研究をされました。また、稲葉洋平さん（開発業務課）は、市長のマニフェスト課題でもある「災害時の被災住宅の再建支援制度の創設」の為の研究をされました。

お二人とも、業務多忙の合間をぬっての調査研究でしたが、その成果は今後の市政にも大いにフィードバックされるものと期待しております。なお、お二人の研究成果の最終報告は月末発行の「藤沢政策研究第 6 号」に掲載されます。

個人を対象とした職員研究員制度については、今年度で一旦終了となり、来年度以降は、政策提案制度などと併せてプロジェクト方式で課題研究に取り組むこととなる予定です。政策研究のマインドが、今後は全職員に波及し、一丸となって課題に取り組む「次のステージ」が展開されることを祈念してやみません。

（政策研究室 稲田 俊）

■ 「藤沢政策研究」第 6 号発行のおしらせ

政策研究誌「藤沢政策研究」の第 6 号（最終号となります）が 3 月 31 日に発行されます。今号は今年度の政策研究室活動のとりまとめとして、職員研究員の研究成果報告や、政策提案制度事業化検討提案書の概要、スタッフのレポートを掲載しております。なお、4 月 13 日から一般頒布を開始します。

■ 附録 政策研究室のあゆみ

- 平成 12 年度 政策研究室の前身となる「市政調査担当」を企画課内に新設（嘱託職員および非常勤職員により構成）。トップマネジメントとしての首長の政策決定を補佐し、多角的、適時的、先見的な情報や判断材料を提供することを目的に、市政課題の調査研究を推進。
- 平成 15 年度 シンクタンクの機能に方向性を転換。新たに市職員 2 名を配置。
- 平成 16 年度 施策紹介図書「湘南の海に向かって～藤沢市の市民参画・協働」（ぎょうせい）出版。
- 平成 17 年度 名称を「政策研究室」に改称。非常勤研究員として大学院生等若手研究者を新たに任用。政策研究誌「藤沢政策研究」準備号の刊行、ニューズレターの発行開始（12 月～）。公共政策講座の開催（3 回）。
- 平成 18 年度 職員研究員制度を開始し、新たに職員研究員 2 名を配置（兼務）。政策提案制度開始。政策研究誌の発行（年 2 回）。ホームページの開設。
- 平成 19 年度 政策研究フォーラム（2 回）の開催。政策研究誌の発行（年 2 回）。
- 平成 20 年度 職員研究員のうち 1 名を慶應義塾大学に派遣。政策研究誌の発行（年 2 回）。年度末をもって政策研究室の活動終了。

藤沢市政策研究室
ニューズレター
Vol. 40 / 2009 年 3 月発行

編集・発行 : 経営企画課 政策研究室（本館 2 階）
TEL : (内線) 2173 (直通) 0466 - 50 - 3517
E-mail : research@city.fujisawa.kanagawa.jp

藤沢市政策研究室ニューズレターは、地方自治に関する最新の情報や政策動向を伝えるため、職員向けに毎月発行しています。掲載した内容は、研究員の個人的な見解です。